ゴム使い切るまで
出られまテン！

ゴム使い切るまで出られまテン！

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20242183

R-18, モ腐サイコ100, ヨシ霊, ♡喘ぎ, 濁点喘ぎ, おほ喘ぎ

師匠総受け『ではない』ヨシ霊です。彼女がいる弟子くんが含まれます。今回は♡喘ぎ、濁点喘ぎ、軽度のおほ喘ぎがあります。良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

ゴム使い切るまで出られまテン！

「おい、起きろ霊幻……起きろ！」
「んがっ……あれ……？俺の芝犬は……？」
「お前がモフってたのは俺の頭だ」
「うわまじかごめんヨシフ」

『目覚めたかね？』

スピーカーから音声が流れ、モニターに茂夫とエクボ、芹沢、トメ、花沢、律、将、蜜裏の姿が映った。
「……多分だけどな、変声機のスイッチ入れ忘れてるぞ、モブ」
眉を寄せて霊幻が突っ込む。
モブ『えっ』
「あとモニター双方向になってる」
モブ『……』
ぶつんっ、とモニターの映像が切れた。
律『……バレたのなら仕方ありません。ようこそ、◯◯しないと出られない部屋へ』
「◯◯しないと出られない部屋……！？なんで俺たちに薬を盛ってそんな所に閉じ込めた！？」
律『いや薬は盛ってないです』
ヨシフの問いに律はさらっと答える。
律『一昨日、仕事帰りのお２人をこの部屋に、芹沢さんの知り合いの方に協力してもらってテレポートさせたら、２人ともふらふらとベッドに倒れ込んでそのまま丸一日グースカ寝てただけです』
「「……」」
律『あんたらどんな生活してるんですか……ちゃんと睡眠は取った方がいいですよ』
「ま、まあ、とにかく、目的は何だ？」
ヨシフが気まずそうに煙草を取り出しながらたずねた。
トメ『結婚してから２人ともゆっくり会えてないじゃない？だから

イチャついて欲しいなって思って！』
「……」
大きなお世話すぎてヨシフは眉間を押さえた。
「……で、この部屋を出る条件は何だ」
トメ『それはご自分で探してください』
「ふざけ……っ！」
声を荒げようとしたヨシフを霊幻が『悪手だ』と制止する。
「あのな、トメちゃん。俺とヨシフはワーカーホリックなんだ。仕事大好き、仕事してないと発狂しちまう」
トメ『えっ……！？』
「あーもう発狂しそう。うっ……ううっ……！」
トメ『ちょ、ちょっと耐えてください……！！ねえ誰か条件知ってる人いない？』
「いやお前らも知らないのかよ！！」
ヨシフが煙草に火を付けながら叫んだ。
テル『うーん……呪いの詳細は最上さんしか分からないから
なぁ……』
「お前らこんなくだらないことに最上啓示を引っ張り出したの！？馬鹿なのか！？！？」
叫ぶヨシフの肩に手を置いて霊幻は頭を振る。
「無駄だよ。相談所メンバーは有能だけどおバカだから……」
「有能な馬鹿ほど怖いものはねぇんだよなぁ！？」
ヨシフの口から出た煙がふわふわとシャボン玉の中に包まれる。
「ん？何だコレ」
モブ『師匠の身体に良く無いんで吸わないでくださいよ。あかちゃん出来てたらどうするんですか』
「モブ何言ってんの！？！？」
「馬鹿野郎妊娠してたら俺だって横で吸わねーっての」
「お前もたいがいだよなぁヨシフ！？！？」
ぜぇはぁと息を切らしながら霊幻は突っ込みに疲れてきた。
モ『あっ最上さんすみません、お寛ぎのところ』
最上『まったくだよ……せっかくヘッドスパを楽しんでいたというのに』

エクボ『吉岡の身体に最上が入ってんの不思議な感じがするな』
「吉岡さんの！！！！人権！！！！」
霊幻は思わず叫んだ。
最上『で？部屋を出る条件、だったな？』
モブ『そうです』
最上『その部屋に置いてあるコンドームを使い切れば出れる』
モブ『……』
芹沢『……』
エクボ『……』
トメ『……』
テル『……』
律『……』
将『……』
蜜裏『……』
「おいおいおい照れんな！照れんな照れんな照れんな〜！！！！こういう部屋用意しておいて照れるんじゃねえ、こっちが恥ずかしくなってくるわ！！」
ヨシフの叫びに、んんっ、と茂夫が咳払いする。
モブ『と、とにかく、その…………コ……こんどぉむ…………を、使い切れば、出れるそうです……』
「声ちっさ！童貞かお前は！！」
トメ『やだセクハラですよヨシフさん！』
「うるせ〜〜〜〜！！この部屋以上のセクハラはねーよ！！！！」
はぁはぁと肩で息をしながら、ヨシフは部屋の中をキョロキョロと探す。
「これか、コンドー……ム……」
すっ、とヨシフは１００枚入りと書かれたカステラみたいな箱を持ち上げた。
「ち◯こ擦り切れるわ！！」
そのままヨシフは箱を床に叩きつける。
「おい馬鹿ども……よく聞け、俺も霊幻ももう３０後半だ。しかもお互いそんなに性欲無いから、せいぜい月１ぐらいなんだよ、ヤるの」

モブ『えっそうなんですか？師匠よくヨシフさんと会ってるから、てっきり……』
「は？ここ最近仕事で会えてねぇが……」
ばっと振り返ったヨシフから霊幻は顔を逸らす。
「おい、怒らないから白状しろ」
「すでに怒ってる！！めちゃくちゃ怒ってる！！」
花沢『全然ヨシフさんの表情の違いが分からない……』
モブ『ヨシフさんポーカーフェイスだものね。師匠良く分かるなぁ』
じりじりとヨシフは霊幻を壁際に追い詰める。
「ち、違うんだって！モブのデートの誘いを断るために……！！」
「は？」
「あああ誤解しか生じない……！！いやだってな、モブが彼女とのデートに俺を誘ってくるから、断り方に困って……！！」
律『兄さん！？』
モブ『ん？』
律『いや、ん？、じゃなくて！！何してるの！？！？』
モブ『だって、今度彼女とデートするから、師匠もどうかなって思って……』
律『師匠も！？！？どうかな！？！？』
モブ『きっと楽しいと思うんだけど』
律『兄さん！？！？駄目だよ兄さん！？！？そんなことされたら彼女さんも霊幻さんも困っちゃうから！！！！』
モブ『そうなの？』
トメ『モブくんの中で霊幻さんってどんな立ち位置なの……？』
エクボ『この師弟は距離感おかしいんだよ』
テル『そういう問題でもない気がする』
はぁ、とヨシフはため息をつく。
「お前ほんと弟子離れしろよ」
「善処する」
「とにかく、この箱じゃ無理だ。ワーカーホリック発狂必至だ。何とかしろ」
芹沢『うーん……分かりました』

「あとコレじゃサイズ小さい。Ｌサイズで頼む」
エクボ『ほ〜ぉ？』
「ニヤニヤすんな腹立つ」
モブ『……』
律『……』
「だから照れんな空気おかしくなる！！」
トメ『正直知り合いの性事情知ることないからワクワクする
わ……』
はぁ、とヨシフはまたため息をついた。
島崎『コレ持っていけばいいんですか？』
芹沢『ごめんね、お願いするよ』
シュン、と部屋の中に島崎が現れた。
「……」
「……」
コト、と島崎はサガミオリジナルをテーブルに置く。
「あっ待て指名手配犯！！」
シュン、と消えていった。
「ちっ……まあいい。１０枚入りか……まあ、これなら何とかなる
か……？」
ヨシフはコンドームを確認する。
「おい、条件について確認なんだが、霊幻がハメて使うのはアリ
か？」
最上『……無しだ。男役のみしか避妊具は使ってはいけない』
「なるほど。軽イキした時に取り替えるのは？」
最上『それも無しだ。しっかり体内で吐精して１回とする』
「どうやって判定するんだよ」
最上『発動している呪いが霊力の移動を測定している』
「……なるほど。おい、この部屋で薬物を使っても身体に影響が出
ないようにできねぇか？」
最上『うん？』
「流石にドーピングも無しじゃ１０発もできねーよ。バイアグラ使
わせろ」
最上『……ちょっと待ってろ』

ぶわ、と部屋の壁に無数の文字が走る。
最上『……これで大丈夫だ』
「すげぇな……かえすがえすもこんなことに使わないで欲しかったな、その力……じゃあバイアグラも用意してくれるか？」
モブ『分かりました』
しばらく沈黙が落ちる。
島崎『ちょっと！さっきからサガミオリジナルのＬだのバイアグラだの買って、私めっちゃヤる気まんまんの人みたいになってるんですけど！？』
芹沢『本当にごめんね……』
シュン、とまた島崎が部屋に現れる。
ぽす、とバイアグラを置いて、消えて行った。
「じゃあ、音声と映像切ってくれ。見られてると思うと勃つもんも勃たねえよ」
モブ『分かりました』
ぶつ、と接続を切る音がする。
「さてと……」
ヨシフはごそごそとベッドの下に潜り込んだ。
「えっ何してんの……？そういうプレイ……？」
「違うわ！どんな特殊プレイだ！！……隠しマイク探してんだよ」
す、とヨシフはピンマイクをベッド裏から取り外して、スピーカーに近づけた。
キィィイイイイン、と金切り音が響く。
将『どわぁっ！？』
「やっぱり聞いてやがったな……さっさと切れ！」
将『ちぇー』
「悪趣味だぞ」
将『へいへい』
今度こそマイクが切られた。
「さて……じゃあさっさとヤって出るか」
「おう、準備してくるわ」
霊幻が備え付けのバスルームに行ってる間に、ヨシフは目に見えるカメラを破壊していく。

「お待たせ」
「ん、お疲れ」
バスローブ姿の霊幻に呼応するように、ヨシフも服を脱いで畳んだ。
「ヨシフ、分かってると思うけど……」
ぎし、とベッドに押し倒されながら、霊幻がヨシフに釘を刺す。
「分かってる。なるべくお前をイかさないようにする」
年齢を経てきて、年々ヨシフはイきにくく、逆に前立腺が開発され続けている霊幻はイきやすくなってきていた。
（この部屋の条件、実は俺よりも霊幻の方がキツい）
ぺり、とコンドームのトップシールを剥がして、ヨシフは緊張した面持ちでコンドームを装着した。
「ん……」
くちゅ、とローションをまぶした指で霊幻の中をヨシフが探る。
「ぁッ……そこ、気持ちいいから、触らないで……」
「ああ、悪い。……くそ、つい癖で性感帯触りそうになるな……」
ぬぐぬぐとヨシフは拡張に専念する。それでも時たま霊幻のイイ所をかすめてしまい、あえかな声を上げさせてしまっていた。
「……久しぶりだからキツいな……」
「はぁっ、う、んッ……でも、そのぶん、早いんじゃね？」
「……最初の１回はそうかもしれんが……」
問題は残り９回である。
「……そろそろいけそうか？」
「いやまだ……ッん、ダメだわ、お前に触られてるとそれだけで気持ち良くなっちゃうから……自分でほぐす……何？」
ヨシフが目を手で覆ってうめいている。
「……何でもねえ。頼むわ」
突然可愛いのやめて欲しい。そう思いながらヨシフは身体をどける。
「んっ……」
身体を起こした霊幻の指が、慎ましやかな窄まりに埋まっていく。
「んんっ……、ん、んっ……」
くちゅくちゅと水音を立てて、霊幻はしっかりと解した。

「……刺激が強い」
「良かったじゃねぇか」
「１回目はもう臨戦体制だから刺激はけっこうなんだよなぁ……」
ぽす、と布団に横たわった霊幻の足をヨシフは持ち上げる。
枕を腰の下に入れて、ぐ、と挿入した。
「アッ……！」
愛する相手がもたらす甘い衝撃に、霊幻は目を見開いてのけぞる。
「霊幻……」
その姿にこっそり胸を締め付けられながら、ぐぐぐとヨシフは腰を進めた。
「ぁう……ッ！」
こつ、と奥を穿たれて、ひくりと霊幻は甘イキした。
「っだから！奥責めちゃダメだって！！」
「あ」
ヨシフは慌てて腰を引く。ぬぽぬぽと根元まで挿れずに抽挿を繰り返す。
「んッ……♡ん……♡」
決定的な刺激は与えられないが、じわじわと性感帯まわりを擦られて、じんじんと霊幻は内部に痺れが募っていくのを感じていた。
「ッイくぞ……！」
「っあ……！」
ヨシフは思わず根本までぐっと押し込んでしまう。
「よ、よしふぅ……っ♡」
深いところで熱い迸りを感じ、霊幻は、はぁっとたまらない吐息を吐いた。
「……っあ悪い！？癖で……っ！」
「だ、いじょぶ……イっ、てなぃ……♡」
身体をピンク色に染めながら、霊幻はたどたどしく答えた。
「すぐ準備するからな」
「んッ……♡」
ヨシフは２個目のコンドームを装着する。
陰茎につーっとローションを垂らして、塗り込んだ。
「挿れるぞ」

「んぁッ……♡」
肉輪を割り開かれる感覚に霊幻はたまらない声を漏らした。
「きも、ちっ……♡きもちいいって……♡」
「耐えてくれ……」
ヨシフは上半身を倒し、霊幻の髪を一撫でしてから唇を合わせる。
「んっ♡んんっ♡♡」
深く舌を擦り合わせようとしたら、霊幻がぐっとヨシフの胸を押し返した。
「どうした？」
「すごっ……すごく、ィイからっ……♡きす、きもちいいからっ……♡……だめ……♡♡」
（生殺し！！）
ヨシフは口を離して、頭の血管が切れそうな感覚を味わう。なかなかの責苦だった。
「クソッ……」
ぬぼぬぼと浅い抽送を繰り返していると、ぎくりと霊幻の身体が強張った。
「ぜんりつせんっ♡♡♡カリが引っ掻いてるからぁっ♡♡♡」
「あ、わ、悪い」
「ぅあああっ♡もうキツいっ♡♡」
身悶えする霊幻に焦ってヨシフは抽挿を速めてしまう。
「あっ♡あっ♡あっ♡ぁあ……ッ♡♡」
「っく……」
ぴくぴく震える霊幻がなんとか絶頂する前に、ヨシフはどくどくと精液を吐き出せた。
「……っ♡つ、ぎは……も、イきたいっ……♡」
「あー、じゃあ１回イっとくか」
ヨシフは使用済みゴムを処理しながら、霊幻の様子をうかがう。
可哀想なほどに陰茎も張りつめていて、苦しそうだった。
３個目のゴムを装着して、ヨシフは熟れてきたぬかるみに自らを沈めた。
「はぁ、っう……♡」
「奥がいい？それとも前立腺がいいか？」

「ぜん、りつ、せん……こすって……♡♡」
図らずも焦らしプレイみたいになってしまったせいで、霊幻が驚くほど素直になってしまっている。
ごく、とヨシフの喉が鳴った。
「……分かった」
たん、たん、と浅く腰を振ると、大きなベッドが軋みを上げる。
「あっ♡あっ♡あ……あれ？」
遠のいていく快感に霊幻は戸惑いの声を上げる。
「どうした？」
「なんか、おさまってきたかも……？」
何気なくヨシフが動かした腰が、ぐりっと前立腺を抉った瞬間。
「あぁ───っ♡♡♡」
ずん、と一気に快楽の渦の中に霊幻は沈められた。
「どうした！？大丈夫か！？」
「よしふっ……♡これ、これぇ、すごいっ……♡めまい、するぅっ……♡」
ヨシフは心配そうに焦点が合わなくなった霊幻の頬を撫でる。
「……っ、そんな締め付けないでくれ……」
「も、イった方が……いいだろ……？」
「それは、そうだが……っく……」
ブルリとヨシフは震える。
「……イった？」
「ああ」
「ふふ」
笑ってヨシフを撫でてくる手にヨシフは指を絡める。
「なんだよ」
「おれできもちよくなってくれるの、うれしい」
うっとりと微笑んでそんなことを言う霊幻に、ヨシフの理性や義務感がぶちぶちと引きちぎれていく。
「霊幻っ……！」
「あっ、よしふっ、次のコンドーム……っん♡」
ヨシフは激しく霊幻に口付ける。
「ぷぁっ♡だめだってっ♡おれまたっ♡イきたくなっちゃうから

あ……っ♡」
口付けの合間に霊幻が囁くようにヨシフをたしなめる。
「うるせえ知ったことか……ッ」
キスの息継ぎがわりに言葉を交わす。
霊幻が器用に震える手を伸ばして、ずるりとヨシフからゴムを外した。
「ほら……もっかい」
す、と目の前にゴムのケースを持ってくる霊幻に、ヨシフはむしゃぶりつきそうになった。
「……っ、そろそろ薬飲むから……お前も水飲んどけ」
ミネラルウォーターのペットボトルをサイドテーブルから２本取り、ヨシフは１本を霊幻に渡す。
「ん」
バイアグラを、水を飲み下しながら、愛撫し合うように２人は視線を絡み合わせた。
「霊幻っ」
４個目のゴムを慌ただしく付けたら、ぐいと待ち切れないとばかりにヨシフは霊幻をベッドに縫い付ける。
「ひぁっ、あぁっ、よしふ……っ♡」
首筋をちゅくちゅくと舌でなぶるヨシフのさりさりした頭を、ぎゅうと霊幻は抱え込む。
「身体っ……♡おかしぃっ……♡ぞわぞわするっ……♡」
「……そそる」
耳に吹き込まれた甘い声に、霊幻は軽い絶頂を感じる。
「ぁ……♡ぁ……♡」
「霊幻、」
する、とヨシフの手が腹を滑り下りていく。
「挿れていいか？」
頷きかけて、ふと霊幻は考え込む。
「股関節……痛くなってきたから、バックでもいい？」
「お前風呂上がりにストレッチしろって前から言ってんのにサボってるだろ？」
「うっ」

「まあいい。もう暴発しそうだから早くケツ差し出してくれ」
苦笑しながら霊幻は四つん這いになる。
「すげえな、流石バイアグラ」
「さあそれは……どうだろう、なっ！」
「ッん！」
ずぐ、と一気に奥まで犯されて、霊幻は唇を噛む。
「ん、んぅ〰〰〰〰っ♡♡♡」
ゆっ……くりと抜かれて、ぞくぞくぞくぅ♡と霊幻は腕にまで鳥肌を立たせた。
「おいまた唇噛んでるだろ。あんまり噛み癖治らないようだったらボールギャグ噛ませんぞ」
「や、やだっ♡」
「ならやめろ」
「分かっ、たぁあああぁあっ♡♡♡」
ずずず、と奥までゆっくり擦られて、ぷちゅ、と亀頭で結腸にキスされて、霊幻は背をのけぞらせた。
「ゃっ……♡やだぁ……っ♡」
「本気で嫌なら止めるが」
「んッ……♡いじ、わるぅっ……♡」
ごり、と霊幻自らヨシフの方に尻を突き出す。
「もっ、とぉっ♡おかし、て？♡♡♡よしふ、にっ♡だかれ、たい……っ♡♡♡」
「──っ……！」
ぎり、と霊幻の腰を掴んだヨシフが、容赦の無い律動を始めた。
「あっ♡あっ♡あぁ……っ♡」
ふわふわと霊幻の蜜色の髪が揺れる。
「やだぁ……っ♡やんっ♡あ、あ、あ、ソコぉ……っ♡だめだって、ばぁ……っ♡」
とろけた声を出す霊幻にヨシフはくらくらしてくる。
「煽ったからには、覚悟してんだろ？」
「なに、が……っ？♡っもぉマジだめだって♡イくぅ……っ♡♡♡」
「っは、キモチいぃー……」
ごりごりとイイ所を押し潰される体位にたらたらと霊幻はうずくま

りながら精液を吐き出す。
内部のうねりに逆らわず、ヨシフも擦り付けるようにして射精した。
「う……♡あ……♡」
まだ余韻に震える霊幻の後ろから逸物を抜き、ヨシフは５個目のゴムをくるくると取り付けた。
「ぃう……っ！？♡おれぇっ♡まだぁ……っ♡っひ！♡♡♡」
きゅうきゅうと締め付ける内部をヨシフは捩じ込むように蹂躙する。
「……っ、すげえな……」
「あっ♡あっ♡まだっ♡ぴすとんしないでぇっ♡イってるっ♡イってるのぉっ♡」
前にハイハイしかけた霊幻の腰を、ずるっとヨシフは引きずり下ろして奥まで打ち込む。
「やぁああぁんっ♡♡♡」
ぶるりと震えて霊幻は終わらない射精にシーツを掴む。内部を圧迫しながら射精を促す怒張のせいで、たらたらと長くこぼすことを強制されていた。
「うっ♡っん♡あっ♡ひっ♡ひぃ……っ♡♡♡」
強すぎる快楽に身体が逃げようとする度に、ヨシフに腰を掴まれて内部に深く押し入られる。
「……っ霊幻、イきそうだっ……！」
「……！やらぁっ♡どちゅどちゅやなのぉ……っあああぁあっ♡♡♡」
ずちゅ！ぐちゅ！と激しくヨシフが打ち付ける。霊幻の逃げようとした手がむなしくシーツを引っ掻いた。
「んぁあああぁあっ♡あっ♡あっ……♡♡♡」
霊幻が身体を丸めて絶頂の衝撃に耐える。
その奥で、熱いものがジワッと出されたのを感じた。
「ふぅ……大丈夫か、霊幻」
「だい、じょうぶに、見えんのか……？♡」
「……次から寝バックにするか。うつ伏せになってろ」
「……わかっ、た」

霊幻の荒い息が響く室内で、ヨシフは６個目のゴムを開ける。
「……挿れるぞ」
「わかっ……んんんン……ッ！♡♡♡」
ずん、とヨシフが奥を突く度に、ごり、と霊幻の性器がシーツに擦られる。
「これぇっ♡♡ちんちんがこすれてぇっ♡♡だめだからぁ……っ♡♡」
「……なんて？」
「だからちんちんッ……っぁああぁあ！♡♡♡」
ぱんぱんと音が鳴るほどに激しくヨシフに犯されて、霊幻はもはや悲鳴のような喘ぎ声をあげる。
「ちんちんは……ちんちんは駄目だろお前……」
「な、何がぁっ！？♡♡わかっ、わかんないぃいっ♡♡♡」
霊幻はシーツに裏筋が擦られて頭がスパークしそうだ。
「んっ♡♡もっ♡♡だめぇ……っ♡♡♡」
びく、びくと全身で震える霊幻を、ぐっとヨシフは身体で押さえ込む。
「……っ、寝バック楽だったろ？」
ずるりと逸物を一旦抜いてヨシフが訊く。
「……っばかぁ♡♡」
何度も襲いくる甘イキに耐えながら、霊幻が誘うような声で言った。
「んー、寝バックもしんどいとなると……対面座位でもするか？」
ヨシフがベッドの上であぐらをかく。
「ほら、上に乗って、ゆっくり腰落として」
「ん、ン〜〜〜〜っ♡♡♡」
ずずず、とヨシフを飲み込みながら霊幻は腰を落としていく。
「座れたか？落ち着いたら足伸ばして、楽にしていいから」
ヨシフの首にしがみつきながら、そろりそろりと霊幻は足を伸ばした。
「ふ、ぅ……っ♡」
「じゃ、揺らすぞ。慣れてきたら骨盤立てたり寝かしたりして、気持ちいいところに当てたらいいから」

ヨシフは霊幻をぎゅっと抱きしめて、ゆらゆらと前後に揺れ始めた。
「っん♡ふふ、何、これ……──ッ！？」
そのともすれば滑稽な動きに霊幻は笑っていたが、ぐ、ぐぐ、と自重で沈み込む身体に息を呑んだ。
「ぅあっ！？♡よしふっ、ゆらさないでっ！♡♡♡」
はく、と霊幻が宙を噛んだ。
「おく、おく、がっ……♡♡ゃめっ、そこは、はいらないで……ッ♡♡」
思わず足を立てて身体を浮かそうとする霊幻に、ヨシフは目を細める。
ぱし、と足を払った。
「あ゛っ♡♡♡♡♡」
ぐぽ、とヨシフの怒張が霊幻の結腸を抜く。
「んぉ゛……っ♡や゛っ……♡♡♡」
がり、と霊幻はヨシフの背中に爪を立てた。
「やらって……っ♡いったのにぃ……っ♡♡♡」
「霊幻、俺を拒絶するな。……俺に全部よこせ」
「……っ♡♡♡」
ゆさ、ゆさと淡く刺激してくるヨシフの頬に、霊幻は頬擦りする。
「しかたない、やつだな……っ♡いいぞ、ぜんぶ、おまえにやる……っ♡♡♡」
はぁ、と高く喘いで、霊幻は串刺されたままメスイキする。
びくびくと不規則に跳ねる霊幻のナカに、じわりと量の少なくなってきた精液をヨシフは塗り込んだ。
「ぬい、ぬい、て……っ♡足、立たな……っ♡」
絶頂の余韻で足がガクガクする霊幻が、ヨシフの首にしがみついて必死に身体を浮かせようとする。
「お、１回寝かせるわ」
ヨシフはそのまま霊幻を支えて前に倒れ込み、霊幻を横たえる。
「んッ♡」
そして、ぐぷっと音をさせながら逸物を引き抜いた。
「ん、んー、股関節に優しくて、しんどくない体位ってなると……

松葉崩しするか？」
「はへ？」
７個目のゴムをつけて、ヨシフは霊幻の左足にまたがる。
「よ、っと」
右足を肩に担いで、ごろんと横になった霊幻のナカにズブズブと侵入した。
「――ッア♡♡♡」
ぐ、と根元まで押し込むと、霊幻がはくはくと口を開閉する。
「どうした？」
「これぇっ♡キツ、キツぃいっ♡♡♡」
「え？大丈夫か？」
ヨシフはあやすように霊幻の乳首を親指でこねる。
「ちがっ♡ちがぁああぁあンっ♡♡きもち、すぎて、キツいのぉっ♡♡♡」
松葉崩しは奥まで入る。霊幻は一度侵入を許したせいでヨシフに馴染んだ結腸を、また犯されていた。
「あのなぁ、あれも駄目これも駄目、どうしろっつーんだよ」
「だってぇっ♡よしふと抱き合うならっ♡どれもきもちよくなっちゃうからぁ……っ♡」
ヨシフはまた目を覆って天をあおいだ。
「ふー……っ、おまえな……」
「だからぁっ♡おくまでいれるの、やめろぉ……っ♡♡♡」
「いやだが？」
ずん、とまた奥を突くヨシフに霊幻は非難の喘ぎ声を上げる。
「きもちーんだよ。ちょっと我慢しろ」
「ンッ♡このぉっ♡けだものぉ……っ♡」
「やめろ興奮するから」
「……ッ♡♡♡」
ぐっぐっと抽挿しはじめたヨシフにまた霊幻は唇を噛む。
「だぁから、唇噛むなって言ってるだろ」
ヨシフはぐっと指を霊幻の唇に割り入れさせる。
「んﾞぁっ！」
「噛むなよ。商売道具だ」

ずぐ、とヨシフは腰を打ち付け始めた。
「ぁがっ、う、う、うぁっ♡」
ぐちゅぐちゅと口の中も、腹の中も掻き回されて霊幻の目から生理的な涙がこぼれる。
「ふぁ、まっ、待っへ……♡♡」
霊幻の願いは聞き届けられることなく、絶頂に追い詰められた。
「う〰〰〰〰っ♡♡♡」
「はは、犬っコロみたいだ、なっ！」
ガクガクとおこりのように震える霊幻が、奥で出した男をねめつける。
「そう睨むなよ、ゾクゾクするから。この体位ならいけそうか？」
「……やだ。正常位がいい」
結局多少股関節が痛くなろうとも、最初の体位が１番感じにくかった、と霊幻は思う。
「分かった」
ヨシフは８個目のゴムを装着して、霊幻の足を持ち上げ、
更に持ち上げて、
どちゅんと上から穿ち落とした。
「お゛ごっ！？♡♡♡よしふっ♡これえっ♡これちがうぅっ♡」
どちゅ、どちゅと内部を抉られて霊幻の足がゆさゆさと揺れる。
「あン？」
「これぇえっ♡たねつけぷれすぅうぅううっ♡♡♡」
勢いよく杭打たれて、びゅっとトコロテンして霊幻は自分に顔射してしまう。
「さいっ♡♡あく……♡♡もやらぁっ♡抜けぇっ♡」
「おー、もう少しで抜けそうだわ」
「そっちの意味じゃ、な……っ♡♡♡あ、あぁ―――ッ♡♡♡♡♡」
びくびくと足が宙を蹴るが、ヨシフの動きは止まらない。
「イったっ♡♡イったからぁっ♡♡♡」
「わるぃ、もうちょい……」
ズパンズパンと何度も結腸の弁を開かれて、霊幻の目の前がチカチカしてくる。
「んぉ゛っ♡♡♡お゛っ♡♡あ゛ぐぅっ♡♡♡」

「……っ、イく……！」
「かは……っ♡♡♡」
ぐっ、とより深く潜られて、霊幻の目がひっくり返りそうになった。
「は、っ……最高だな……」
ピクピク震える霊幻の足を下ろして、ヨシフはゴムを適当にはいで次のゴムをつける。９個目だ。
「やっ♡もうやらぁっ♡」
それを見て霊幻がよろよろと起き上がって逃げようとする。
「おい待て逃げんな」
膝立ちになった霊幻の後ろから、ヨシフはぐっと肉輪の中に押し入った。
「ァあ……っ♡♡♡」
「逃げるなよ。噛みつきたくなる」
べろりと首の付け根を舐められて、ひっと霊幻は喉を鳴らす。このままじゃヤリ殺される──そんなことまで脳裏によぎった。
「しっかり、立ってろ、よ！？」
がすがすと後ろから犯されて、あふれたローションがももの内側を伝っていく。
「ひっ、ひっぁ、ぁア゛っ♡♡♡」
がくがくと震える腰が、意図せずヨシフにねだるように尻を擦り付ける。
「積極的じゃねぇか」
「ちがっ♡ちがうぅっ♡♡」
きつく目を閉じて絶頂を耐えた霊幻の締め付けに、また少量の精液をヨシフは吐き出した。
「もっ♡ほんとっ♡むりぃっ♡」
１０個目を装着するヨシフから、這いずるように霊幻は遠ざかる。
「ちょっと、きゅうけ、いっ！？♡♡♡」
１人用ソファーの背もたれを抱くように寄りかかった霊幻の、ナカに無遠慮に熱い杭が押し入った。
「あ゛っ♡あ゛あ゛っ♡あああ゛っ♡♡♡」
「そのまま椅子抱いてろ。丁度いい」

ギコギコと激しい音をソファーから響かせながら、ヨシフは霊幻の熱泥をかき回していく。
「んっ♡んっ♡ひッ……！？♡」
カリ、と乳首を引っ掻かれて、ぎくりと霊幻は身体をこわばらせた。
「やめっ♡ちくびだめぇ……っ♡」
「……気持ち良くねえか？」
「やっ♡んはぅっ♡ちくびっ♡ちくびきもちいい、からあっ♡♡」
「なら、いーじゃねえか」
はっ、はっと呼吸を荒くするヨシフから、ぽたぽたと汗が背中に落ちてくる。
その感覚にすら痺れを感じて、くぅんと霊幻は喉を鳴らす。
「っよしふっ、それっ、それ好きぃ……っ♡」
ぎくりとヨシフが固まる。が、すぐに激しく抽挿を再開した。
「霊幻、れいげん気持ちいいか？これ好きか？」
「好きっ♡すきぃ……っ♡」
「……俺のことは？」
はぁっ、とうっとりと霊幻は微笑んで蕩けた息を吐いて。
「……愛してるッ♡」
びゅく、と思わず精を吐き出したヨシフが、意識を絶頂に飛ばそうとしている霊幻の頭を片腕に抱く。

好きだ

ぼそ、と掠れた声で囁いた。

※

「あ゛ー腰いたーい喉いたーい」
ぶつぶつと布団にくるまった霊幻がヨシフに恨み言をぼやいている。
「しつけえぞ」
「うっせ！お前はさあ、薬のんでたからさあ？余裕だろうけど

さ？」
最上『それについてなんだがな』
ずぞぞぞ、とコンビニ期間限定のカップ麺を啜りながら吉岡に憑依した最上がモニターに現れる。
最上『すまない、副作用だけ消すというのは難しくてな……結局薬効まで消してしまった』
「ということは……」
ただただ、ヨシフが絶倫だったというだけ、である。
「……」
「……」
「そ、そういえば、他のメンバーはどうしたんだ？」
ヨシフが話を逸らした。
最上『うん？みんな後ろで寝ているよ』
最上はカメラをいじって後ろを映す。
最上『コンビニスイーツをつつきながらつもる話をした後、たこ焼きパーティーをして、皆で蜜裏邸の豪華な風呂を楽しんだ後、UNOや大富豪をして、枕投げをした後、疲れて寝落ちした』
「めちゃくちゃ楽しんでる！！」
最上『いやあ超能力有りの枕投げだったからすごい迫力で』
「ちょっと待てなんかちらっと鈴木統一郎が映ってるんだが？」
最上『息子の初お泊まりを心配して途中から合流した』
「過保護が過ぎないか？」
最上『たこパから居たな』
「エンジョイしてるな！？」
最上はごっごっとカップ麺のスープを飲み切ったら、次のカップ麺を作ろうとしている。
「ちょっちょっちょっちょっと待て！吉岡さんの身体が！！」
最上『む？』
「身体に！！悪いから！！」
最上『ふむ……それでは、この季節の野菜のバーニャカウダにするか……では、ドアは開いているから、自由に帰ってくれたまえ。
あ、そうそう

結婚おめでとう』

ぶつ、と通信は切れた。

「……帰るか」

２人はよろよろと部屋を出る。
「あのさ、ヨシフ？」
「ん？」
そろ、と霊幻は小指をヨシフに絡める。
「俺も、枯れてる……ってわけじゃないから、さ」
「？」
「ひ、一晩に……１回とか２回じゃなくても、いいんだぜ？」
「！！」
おもはゆそうにヨシフは顔を歪めて、きゅっと小指を絡め返して、離す。
「なら、遠慮なく」

そうやって連れ立って、２人は歩いていった。

終わり